家譜に見る
恩納間切の検者とその周辺

恩納村史「歴史編」専門委員　輝 広志

「家譜」とは何か？なぜ「家譜」をめくるのか？

家のルーツを知る史料に家譜があることをご存知でしょうか。今回は「歴史編」の専門部会で収集・整理している史料の中から家譜を紹介します。

家譜には、先祖から子孫までの一族代々の関係を示す「世系図」と、先祖や子孫の勲功や履歴などを記した「紀録」が収録され、一般に「系図」とも呼ばれています。1689年、首里王府に「系図座」という役所が設置されて以後、「士族」の各家から家譜が2部提出され、1部は「系図座」が管理し、もう1部は「首里之印」が捺されて各家に下賜されました。近世琉球の身分は、大きく分けて「士」（いわゆるサムレー。廃藩後の呼称は「士族」）と「百姓」（いわゆる庶民。廃藩後の呼称は「平民」）の2つがあり、家譜を持つことで公的に士と認められたのでした。ちなみに首里王府は、士を「町方」に、百姓をおもに「地方」にというように、身分により居住についても固定していきました。

さて、士の証である家譜を一つひとつめくっていくと、近世琉球の恩納間切に関連する記事に出会います。なかでも紀録の部分では、人物の活動内容や勲功、首里王府からいつ誰がどこの土地を知行地として許されたか（誰が間切を領有する惣地頭または村を領有する脇地頭になったか）、そのほか婚姻関係等が記されています。それらに注目することで、人物の活動を通じての「恩納」という場の歴史的な関わり、士と恩納出身者との関係、引いては士と「恩納」との関係を知る手掛かりになり得ます。

現在、家譜にある「恩納」関連の記事の調査・確認中であり、断片的な情報の記事も含めて多岐にわたりますが、本稿では恩納間切の検者を務めた人物の家譜を取り上げて紹介します。

恩納間切の検者とその周辺

検者とは、首里王府が疲弊した間切を再建するために派遣した役人のことで、おもに農民の指導・監督をする役割がありました。一部では、王府の役職にありつけず田舎下りした士たち（屋取集落の士たち）を監視したようであるとの言及もあります。

では、首里士の家譜を見ることにしましょう。『呉姓家譜』（那覇市歴史博物館所蔵複製本）七世 幸孝の紀録には、「乾隆二十五年庚辰十二月朔日為恩納間切検者叙勢頭座敷」とあります。

幸孝は1760年12月1日に恩納間切の検者となり、勢頭座敷（従六品）の位に叙されたことがわかります。恩納間切の検者として確認できる内容としては古い時期のもので、内容はシンプルです。しかしながら、実は「恩納村史編さんだより68」で紹介された王文治の扁額（恩納村指定文化財 恩納村博物館にて展示）に関係する人物でもあります。1756年に中国より来琉した冊封使に随行していた王文治に書を依頼したのが呉姓久高筑登之親雲上幸孝（くだかちくどうんぺーちんこうこう）で、検者として在任中の1763年のことでした（川島淳「歴史資料を集めて読み解くこと～恩納間切番所の光景を中心に～」参照）。家譜の記事だけでは見えてこない事ですが、首里王府から派遣された検者としての本分とは別に、文化の伝播者としての姿が浮かび上がります。

もう一人、首里士の家譜を見ることにしましょう。『明姓家譜』（那覇市歴史博物館所蔵複製本）九世 長和の紀録によると、1831年12月1日に恩納間切検者となっています。翌年3月17日夜に恩納間切

谷茶村沖で大和船（薩摩船）が破船した事に伴って、長和が支援をしたことに対して首里王府より褒賞されており、その書状が記されています。

これによると、破船したのは柏原盛右衛門の大吉丸で、恩納間切検者の亀谷筑登之親雲上長和が下役たちを引き連れて現場へ駆け付け、薩摩の「御用品」や御蔵方の公用物、人々の浮荷を沖から取り揚げるなどの始末を昼夜通じて行い、橋船や「すの板」を紛失した際も村中で話し合い、万端の管理に手抜かりの無いよう取り計らって、皆で丁寧に対応したとあります。そして長和の勤功を取り立てるよう、前任の薩摩在番奉行・町田平と唐物方の役人たち、首里王府の取納奉行からも連絡があり、三司官の名で書状が書かれました。さらに同家譜には、10月付薩摩家老から「晒壱疋（さらしいっぴき）」を与える書状が収録されており、長和の手厚い対応が評価されていたことがわかります。なお、恩納間切沖での漂着や破船等の記事は他の家譜にも散見され、こうした海難事故や事件は度々起きていました。緊急の対応でしたが、間切を監督する立場だった検者だからこそ出来た現地での対応なのかも知れません。

まとめにかえて

最後に、私の問題関心の一つを述べます。

那覇士の『容姓家譜 大宗』山田家（那覇市歴史博物館所蔵複製本）では十一世義篤が道光二十（1840）年に、『容姓家譜 支流』山田家（那覇市歴史博物館所蔵複製本）では九世 義教が嘉慶十（1805）年にそれぞれ恩納間切検者になっていることが確認できます。いずれも家譜の記述上では恩納間切の検者となっていることのみがわかるわけですが、首里王府から現地に派遣される役人であったことから、検者在任中に恩納間切の土地勘や人脈を得ただろうと考えられます。そこで、喜瀬武原の「入植記念碑」（2020年、喜瀬武原区建立）に記載されている方々と、家譜で確認できる検者の経歴から屋取集落形成と関係があるかどうかという問題が見出されます。それには家譜の容氏と屋取した山田（容氏）との関係を確認することが課題であり、また入植した他家との関係はどうだったかという方向からも考える必要があるため、問題解明は簡単ではありません。しかしながら、恩納村における屋取集落の形成を考える上でも、検者の存在は興味深いものがあるのではないでしょうか。

そしてもう一つ、検者の他に18世紀後半から19世紀初頭にかけて設置され、間切の指導・監督にあたった下知役の活動についても可能な限り「歴史編」で明らかにしたいと思います。

近世琉球の恩納間切の姿を見つめていくべく、家譜をめくりながら関連記事を探る作業はまだまだ続きます。

喜瀬武原の「入植記念碑」

【参考文献】

- 比嘉春潮・崎浜秀明編訳『沖縄の犯科帳』東洋文庫41（平凡社：1965年）
- 渡口真清著『近世の琉球』（法政大学出版局：1975年）
- 金城正篤著『琉球処分論』（沖縄タイムス社：1978年）
- 田名真之著『沖縄近世史の諸相』（ひるぎ社：1992年）
- 川島淳「歴史資料を集めて読み解くこと～恩納間切番所の光景を中心に～」「広報おんな」（恩納村：2019年9月）